

るユーモア。「うつとり溺る」が、なんとも、いい。

おもふより面影ちかくうたたねを分けてほのぼのか  
よふ橘 梶間和歌

口語はつかわない。文語それも古語中心の文語だけを用いる。その方針で辛抱ぶよく作歌をつづけている作者である。私は、つい最近、ある新聞の取材に、完璧に文語を使いこなす新人を待望するという話をしたばかりである。この口語歌氾濫時代の歌壇で、あくまでも文語・古語をマスターしてそれでゆこう、という選択を支持したい。

ただ、用語は古典の引用でいいが、意味内容までもそれでは通用しない。この作、想像と夢の近似と差異という微妙なところをうたっていて魅力的だが、やはり現代ならではの何かがほしい。この作でいえば、「橘」があるので古典へ行つたきりになってしまう。もつたいない。笑ひ顔だけは昔の母にしてケイトウの赤い花をよる  
こぶ 高山邦男

母親の介護をする息子の歌。鮮明かつ印象的な下句とひびきあつて、「……だけは」が、なんとも、切ない。

稲藁を束ねるわれの後ろより雉鳩の来て田螺を漁る  
水本光

「稲藁」「われ」「雉鳩」「田螺」「束ねる」「来て」「漁る」と、名詞と動詞がどれも輪郭すつきり明快に使われているために、読者は太い輪郭でふちどった絵を見るように、具体的かつ鮮明なイメージを思い浮かべることが

できる。

顔見知りの五人と犬に今朝は会う住み馴れし街駅ま  
での道 蔵田道子

何十年か同じ街に住むと、特に親しいというわけでもなくても、顔なじみの人や犬、猫等ができる。ここでは人と犬。わざわざ五人と数詞を出した点が見どころ。

曲線のない家具ばかりに囲まれて柔軟体操してみた  
き夜 吉野美野里

人間の肉体には、一カ所たりとも直線がない。自分が人間であることを確認するために、曲線だらけの肉体を確認したいというユーモアである。ユーモア感覚の冴えに感心した。

玉川通りに大山蓮華が咲いてゐる教へてくれし人を  
思ふも 原口嘉代子

住正代さんへの挽歌中の一首。住さんは植物と鳥に詳しい人だった。「玉川通り」は駅からわが家へ来る通り道だから、編集・校正の行き帰りのことだったのだろう。

鳥が好きで住さんは鳥になったのだ眩しく飛んでいるのが見える  
宇都宮とよ

今月の八首は、みな住正代さんへの挽歌である。作者と住さんとは長い間の仲のよい友人同士だった。八首には、深く重い哀悼の思いが読める。住さんは、植物に詳しいのと同じくらい鳥にも詳しくかった。鳥が好きで、鳥の歌が多かった。鳥が出てくる短歌をたくさんのかされた。あらためて、ご冥福をお祈りする。